

△コメント▽

## ケイト・ナカイ「徳川朝幕関係の再編

——新井白石の幕府王権論をめぐって——

澤 井 啓 一

「転換期における国家と天皇」というテーマのもとに、いわば近世を代表するかたちで新井白石が取りあげられると聞き、さらに、そのコメントイターを要請されたとき、すこし戸惑いがあった。それは、白石に関して私がなかば素人に近いということもあったが、それ以上に、「転換期」ということと白石とが私のなかですぐに結びつかなかったからである。もちろん、白石は朝廷と幕府の関係について政策的提言をしていたから、「国家と天皇」というテーマにはふさわしいかもしれないが、「転換期」とはどこまで関わるのかという懐疑の気持ちがあった。歴史上のいかなる時点もつねに「転換期」であると断言することも可能かもしれないが、客観的にみれば、白石の生きた時代が近世の他の時期に比べて著しく「転換期」であったとはいえないだろう。たしかに白石が主導するかたちで幕府の政治改革が実行されたにしても、譜代大名による合議制から將軍を中心とした側近政治への移行という徳川日本の政治システムにおける大きな変化は、すでに白石以前に成立していた。また経済システムにおける変化については、白石以前の元禄期とそれ以後

の宝暦・明和期をあげるのが一般的であろう。このように従来の歴史学的な「常識」に導かれた白石の時代の客観的諸事象は、「転換期」というよりも、むしろそれ以前に確立されたさまざまなシステムを継承した「安定期」を指しているように私には思われた。

だが、ケイト・W・ナカイさんの議論を聞きながら、すこし考えが変わってきた。ナカイさんは、これまでの朱子学に基づく合理主義者白石という理解とは異なり、新たな一元的政治システムを構想し推進しようとしたが、その論理的な矛盾によって挫折しなければならなかった変革者として白石を描いているからである。ナカイさんによれば、白石は、儒教的な「名実」論に基づいて、鎌倉幕府以来の朝廷と幕府という二元的な政治システムを、徳川幕府による一元的な政治システムへと転換しようとしていたという。さらにナカイさんは、こうした白石による△実▽優先の「名実一致」が、現実には転換期を迎えた徳川後期になると、△名▽優先の「名実一致」へと逆転されるという歴史的過程を語っている。つまり、白石は、その意識のなかで明らかに「転換期」に生きていたのだが、この想

像された「転換期」は、ネガティブなかたちではあるにしても、のちの「転換期」における議論を呼び起こす契機となったというのである。このように考えると、白石という孤独な変革者が構想した「転換期」の内実を検討することは、たとえそれが現実とは切り離された想像上の「転換期」であろうとも、いや、それが白石の構想力に基づく想像上の産物であるがゆえに、よりいっそう近世思想史上の重要なテーマとなると思われる。

さて、ナカイさんの白石像の具体的内容にもうすこし立ち入って述べることにしたい。徳川将軍を△名▽と△実▽が一致した「日本国王」とするために、白石は天皇家から歴史的な特権を剥奪しようとした。『古史通』や『読史余論』などは、こうした意図のもとに、古代日本において「易姓革命（天孫降臨）」が存在したこと、それによって支配者となった天皇家がみずからの責任において衰退を招いたこと、さらに源頼朝から豊臣秀吉までの武家政権は「覇者」にすぎず、徳川将軍こそが新たな「王者」として登場したことを証明するために書かれたとナカイさんは指摘する。つぎにナカイさんは、白石の朝廷に関する政策的提言が、天皇家から徳川将軍への王権の「禅譲」、つまり武力によらない「易姓革命」を実行するための戦略的構想に由来していたと指摘する。しかし、こうした白石の構想は、対外的な場面において、もちろんも破綻する。直接的には李氏朝鮮との外交関係において、さらには、その背後にあって議論の表面には浮上していないが、ながく東アジア世界の△王権▽の正統性を領有してきた中国との関係において、日本の△王権▽の卓越性を主張するために、白石は天皇家の連続性を明証してもちたさ

るをえなかつた。そして、このことがこれまで存在した天皇と将軍による二元構造へと白石を後退させ、かえって「神道（祭祀祈禱）」という曖昧な天皇の領域を問題化させる契機となったとナカイさんは結論づける。

私に要請されていることは、こうしたナカイさんの白石像を近世日本思想史の他の事件と関連づけながら、白石の思想をめぐる問題を明確にすることでであろう。もちろん、このことは、ナカイさんの白石像を全面的に受け入れるということを意味してはいない。徳川将軍の正統化のために白石が歴史の纂奪を図ったというナカイさんの新しい解釈には、合理主義的な歴史解釈という従来の白石理解が打破されたという点で、新鮮な驚きと共感を覚えるのだが、現実の政治実践との関連において、とりわけ李氏朝鮮との外交関係において、白石が論理的矛盾に陥ったという点については、ただちに納得できるわけではない。なぜなら、この種の整理は、理想主義者が現実の政治闘争のなかで敗北に向かって後退しつづけたという政治思想史のありふれた図式のなかに白石を押し込めることにすぎなくなるからである。

たしかに白石の政治改革は挫折したが、それは、将軍の死去にもなつて生じた、白石が直接に関与することのできない政治権力闘争に起因しており、かならずしも論理的な破綻によるものではない。現実の政治実践の場面における白石は、ある場合には将軍の権威を高めようとする忠実な側近として、ある場合には「尊皇家」として、またある場合にはナシヨナリストとして、それぞれの局面で放つ色彩が異なり、とても首尾一貫していたとはいえないにしても、

そのときどきにおける自己の役割を誠実に演じていたように思われる。ここから先はナカイさんの解釈に触発された私の勝手な推測にすぎないが、現実の政治的実践において多面的な方向をとらざるをえないことを自覚し、さらには来るべき政治的敗北を予期するなかで、白石は自身の変革の構想を歴史叙述として描いたと考えるべきではないだろうか。つまり、白石の変革への志向性は、矛盾に満ちた具体的な政治的実践とはいったん切り離して、自己の構想を忠実に反映させた歴史叙述という点においてのみ読み解かれるべきであろう。白石の変革の構想が近世日本思想史上の事件として重要な意味をもつとしたら、自己の構想を歴史叙述という形式のなかに取り込み、歴史を領有化できたことにある。従来の白石理解が、合理主義者というイメージにとらわれて、白石の議論にあまりにも首尾一貫性を求めすぎていたのは確かであるが、それを批判するナカイさんの解釈も、政治的実践と変革の構想との緊密な関連が前提となっており、そこから矛盾・後退という評価が生じている。それは、白石を、思想家というよりも政治的実践者として位置づけるのに等しいことのように私には思われる。

ところで、 $\wedge$ 王権 $\vee$ の正統性を語るために歴史の領有化を目指すことは、中国歴代諸王朝の『正史』をもちだすまでもなく、中国ないし東アジア世界における $\wedge$ 王権 $\vee$ 論の伝統的な方法であった。近世日本においても、すでに白石以前に、徳川幕府の正統性を語ったものとして林家の『本朝通鑑』があり、皇統の連続性に日本的秩序を求めようとした前期水戸学の『大日本史』の編纂があった。こうした先行する歴史叙述との相違として、白石には $\wedge$ 正史性 $\vee$ 、すな

わち権力による認定が欠如していた点をあげることができるとも、『本朝通鑑』と『大日本史』がはたして『正史』であるかと言えど問題は多いだろうし、また『読史余論』が家宣が没する年の進講であったことを考えると、白石にも $\wedge$ 正史性 $\vee$ を獲得できるという計算があったのかもしれない。しかし、『本朝通鑑』と『大日本史』はさておき、白石の歴史叙述は、白石個人による領有化にすぎなかった。こうした $\wedge$ 正史性 $\vee$ を喪失した分、白石の歴史叙述は、先行する歴史叙述につきまとうていた天皇の中心的役割を排除できた。紀伝体の『大日本史』はもちろんのこと、編年体の『本朝通鑑』でさえも、天皇の在位を基軸とした歴史叙述の形式を採用していたのに対し、白石は、 $\wedge$ 勢 $\vee$ と $\wedge$ 変 $\vee$ というタームによって、日本の通史を描くことができたからである。

この $\wedge$ 勢 $\vee$ と $\wedge$ 変 $\vee$ という白石のタームは、歴史における不可逆性の理解として一般に高く評価され、そこに朱子学的合理主義を認めているようであるが、そうした見解が正しいとは私には思えない。白石の $\wedge$ 勢 $\vee$ と $\wedge$ 変 $\vee$ に基づく歴史叙述が不可逆的色彩を帯びるのは、過去と現在との関連のみに止め、未来について沈黙しているからに他ならない。また、朱子学的と言われているが、白石の $\wedge$ 勢 $\vee$ は、「氣」のレヴェルに属する $\wedge$ 事勢 $\vee$ であって、 $\wedge$ 理勢 $\vee$ ではない。白石は「天の応報」をもちだすが、それは、たぶん『太平記』あたりから強く主張されだした「応報」観、不可知な何かによってつき動かされた事件の推移として歴史を物語ることのヴァリアントにすぎず、神仏や天道にかわって「天」を用いただけである。もちろん、「天」の問題は「易姓革命」と関連するから、儒教の歴史叙

述に白石が従ったと考えることはできる。しかし、このことは、「天」を「(天)理」に置換しようとする大きな文脈のなかで成立してきた朱子学、すなわち「理」に優先することになりかねない「天」の神秘化を避けていた朱子学から逸脱し、むしろ古代儒教の呼び起こしの方向に進むものといえよう。すくなくとも朱熹自身は、「天」と「理」の関連に苦慮しながらも、 $\wedge$ 理勢 $\vee$ として歴史の動向を把握しようとしていた。白石の $\wedge$ 勢 $\vee$ と $\wedge$ 変 $\vee$ には、そうした苦闘の跡を認めることはできない。

もっとも、上記のことは、白石を朱子学者として規定しようとする私の思い込みが強すぎる結果であるかもしれない。白石自身は無自覚であったにしても、仁斎や徂徠と同じ問題領域のなかに位置していたと予想できるからである。ここでは、これ以上、この問題に触れるゆとりはないが、白石の歴史への関心そのものが同時代的イシューであったことは確かに指摘できよう。ともあれ、白石は、日本の歴史を初めて「易姓革命」の歴史として描くことができた。ナカイさんが指摘するように、白石が記紀神話の神々を人間として把握したのは、実証主義的な成果ではなく、「易姓革命」の歴史を可能なものとするためのしたたかな計算であろう。そして、白石が近世日本にもたらした事件性は、この点にこそ認められるべきである。だが、「易姓革命」は、有徳な君主が天命に基づいて新たな王朝を創始するという言説であり、そこでは、神秘的な天の力とそれに呼応する王者の徳という装置が必須であるから、「徳」、とりわけ君主たりうる「徳」とは何か、あるいは「天」ないし「天命」とは何かを説明する必要があった。たしかに古代儒教では、こうした問題は

神秘のヴェールに包まれていた。しかし、朱子学はそれをできるかぎり説明可能なものとすることを目指していたと考えられるし、また、仁斎や徂徠といった同時代の儒者たちは、朱子学の説明に異議申し立てをしながらも、それぞれ異なる理論的布置における「徳」や「天命」などを説明しようとしていたと思われる。この点からいえば、白石の場合、朱子学のインパクトを受けていたはずであるのに、「徳」も「天命」もほとんど説明されていない。つまり、白石の「易姓革命」論は、形式的な応用に終始して、その内実はあまりにも稀薄であった。

やがて、白石の「易姓革命」の歴史 $\parallel$ 物語は否定されてゆく。その中心に位置したのは、平田派国学と後期水戸学である。かれらの歴史叙述では、起源としての、それゆえ一回かぎりの完結態としての、神秘的な何ものかによる王者の任命が語られているが、それは、白石において稀薄であった内実を補填する作業として読み解くことができる。平田派の場合、神々による委任(ミヨサシ・コトヨサシ)として説明するのだが、そのとき平田派が踏襲したものは、白石が記紀神話の解釈として採用した戦略、すなわち神名などを文字通り分節化し、断片化された語を理解可能な同時代の言葉に置換するという言語論的戦略であった。それは、徂徠や宣長のように古代語のなかに参入するという方向とは逆の、古代を現在に呼び起こすための言語論的戦略であった。また、後期水戸学の場合、とくに会沢正志斎において顕著であるが、「天祖」というテーマによって、記紀における事件(かれらにとつての歴史的事実)と(儒教の言説たる)「徳」と「天命」との同一性を説明することができた。それは、白

石にとってアポリアともいえる稀薄な内実を、歴史叙述のなかに獲得できたことを示している。さらに、後期水戸学では、なによりも白石の議論に欠如していた「天」と王者との結びつきを物語るプラクティカルな事実、すなわち日本における「祭天」儀礼の存在を大嘗祭の再定義によって示すこともできた。

平田派国学と後期水戸学について説明が不十分なことは承知しているが、なにぶん、紙幅に余裕がない。ここでは、白石の「易姓革命」史論があまりにも形式的であったがゆえに、古代日本あるいは神話的日本を呼び起こしてしまい、近世日本思想史上の事件となつたという私の見解が少しでも伝えられるならば、それでよしとしたい。こうした私の見解が、ナカイさんの△名▽△実▽の逆転という歴史的展開とどれほど異なるのか、詳しく検討してみなければよく分からない。また、私の見るところ、白石の議論に問題があるとするれば、外交政策といった現実的課題から惹き起こされた矛盾ではなく、解釈それ自体が自身の立場を危うくするという解釈学そのものの問題性であったように思われる。そして、かりに白石の問題性がそのようなものであったにしても、白石の歴史叙述は——むしろ歴史叙述のみが——かれ自身の構想をとりあえず忠実に反映していたと認めることができよう。それゆえ、私は、白石のことを、「(易姓)革命」を夢想した孤独な変革者と呼びたいのである。

(恵泉女学園大学助教授)